

## 事例紹介

演劇手法を用いた多文化共生の  
地域づくり

(公財) 可児市文化創造センター <sup>アラ</sup>ala 館長兼劇場総監督  
衛 紀生

可児市ってご存知ですか。岐阜県と愛知県の県境辺りにある10万人のまちです。日本モーンキーパークや明治村のある犬山市からは電車に乗るとすぐに可児市に入ります。外国籍で住民登録されている方は約5,600人。住民の約6%に当たります。

今回は、この可児市にある可児市文化創造センター <sup>アラ</sup>alaの「演劇手法を用いた多文化共生の地域づくり」という取り組みについて紹介させていただきます。

## 不在の外国人サービスに光を

私がアラの館長兼劇場総監督になって現在5年目。着任してすぐ、たいへん強い違和感をアラから感じました。

「違和感を感じる時は変わるチャンスだし、変えるチャンスだ」という私の哲学に則り、アラを変えよう、考え方を変えよう、職員の間を変えよう、意識も変えよう、組織も変えようと、いろんな仕組みづくりをしました。そのときにも、外国人に対してのアラの考え方というようなものにとっても違和感を感じたんです。

例えば、確定申告の時期など、役所ではた

くさんの外国人の方が通訳をとおして申請をしています。しかし、アラは外国人にサービスを一つもしていなかったんです。

アラが外国人を含めた納税者からの税金で設置・運営されている以上、やはり何かすべきではないか。そう考えていたころ知り合った若い友人、世田谷パブリックシアターの研修生だった女性が、日本外国特派員協会で「演劇的な手法でパフォーマンスをやる」と聞きました。そこでアラでは、多文化共生プロジェクトをやる、と違和感を形にし始めました。日本では先例がなく、指導者もいないということで、失敗を重ねながら技術の集積をしているところです。

## 経営とは新しい価値の創出

アラは東西南北に入り口があり、アーティストも市民もスタッフも、どこから出入りしても自由という、一種の哲学をもった施設です。この、まるでまちと地続きになっているような施設を任された私のマネジメント哲学は「経験価値創造」。これは、「お客様が経験して感じた価値がすべてである」という考え方です。

つまり、すべての価値、決定権はお客様に任せる。私たちが価値判断をして、「これはいいから見て少し勉強しろ」とか「東京ではやっているからこれを見なきゃいけない」と上から目線で押し付ける施設ではないのです。私たちは“半歩”だけ先に行くけれども、その“半歩”を市民にぜひ“価値”として受け取ってもらいたい。もちろん外国人も同じです。

これを私はもう20年ほど「創客経営」と呼んでいます。お客様を“つくる”から“つく



東西南北どこからでも出入りできるala

り続ける”と進化してきました。もちろん外国人の方にも参加してもらって、その中で仲間をつくり、さらに関係を濃密にしていって進化していく。

公共文化施設の中にはつくるのが目的であったり、単なるモニュメントで終わったりするものもあります。でも私は、劇場やホールは「政策手段」だと思います。つまり、地域、コミュニティーをこうしていきたい、という役所の考えを実現するための政策手段として、劇場とかホールがあるという考え方なんです。

日本にはこういう考え方はまったくないんです。だから、お客様の受け取った価値がすべてであるという考え方もありません。

ところが、それが実は可見市では受け入れられてきた、受け入れられてきている。だから、さまざまな価値を創り出す事業に取り組んでいる。経営というのは新しい価値の創出なんです。

例えば、多文化共生プロジェクトの取り組みを通じて、ブラジル人のコミュニティーにいた人がフィリピンのコミュニティーにいた人と知り合う、あるいは日本人と知り合う、あるいは日本人の障がい者と知り合う、これはまさに新しい価値なんです。その新しい価値を多様につくる。さらに、その価値をどんどん大きくしていく。一生懸命頑張ると、価値には利子がついていきます。

アーラにとって、こうしたさまざまな文化を持つ人々と関係ができていくことは、資産です。それがさらに太いパイプになっていけば、利子がついてもっともっと太い人間関係ができていく。

この無形資産がコミュニティーを健全化する。地域社会を健全化する。そこに住んでいる人間を健全化する。そしてそういうものが健全化されないかぎり、劇場、ホール経営は健全化しないというのが私の考えです。

つまり、地域があまり健全ではないのに劇場経営だけ健全ということも、劇場が健全経営されているのに地域が不健全であるという



“利子”を生み出す仲間づくりワークショップ

こともありません。劇場、ホールの成果は、必ず劇場、ホールの外に出ます。

だから、アーラの職員とは、「劇場、ホールは社会機関である」「新しい価値をつくる」という考え方を共有しています。

## まちに拡がるアーラ

アーラでは、「alaまち元気プロジェクト」というコミュニティー・プログラムに取り組んでいます。その一つが外国人との多文化共生プロジェクトです。

平成22年の実績で、このプロジェクトは年間324回、1日1回のペースで実施しています。例えば福祉施設がアウトリーチして、コンテンポラリーダンスで障害者福祉施設、高齢者福祉施設で関係づくり、仲間づくりをする。こういうワークショップを年間320回以上実施しているわけです。

アーラの平成22年度施設利用者は、カウントできただけでも29万4,000人。仲間で集まってお弁当を食べたり、読書を楽しんだりできるフリースペースの利用者や「alaまち元気プロジェクト」参加者はおよそ4万3,000人。その合計である来館者数はおよそ33万7,000人。客席稼働率、観客数からみても、「まちに拡がるアーラ」といえるかもしれません。

## 多文化≠国籍の違い

“多文化”というと、日本人がいて、ブラジル人がいて、フィリピン人がいて、在日のコリアンの方がいて、チャイニーズの方がいて……ではないと考えます。日本人の中にも多

文化があるんです、一人ひとりの個性が多文化という。館長2年目にそのことに気づきました。

プロジェクトの中で、ボスニア・ヘルツェゴビナで少年期を過ごしてオーストラリアに移住した方が、自分の少年期、ボスニアでの経験を話されたんです。ものすごい衝撃がありました。多文化というのは、実は国籍の違いじゃない。つまりは、経験の違いなんだと。100人の日本人がいれば100通りの文化があって、この経験を交流することが大切である。あるいは、障がいを持っている人と持っていない人それぞれに文化があって、その文化が交流する、交流して新しい価値を生むことが大事なんです。

そこで3年目から、「ドキュメンタリープレイ」という方法を導入しました。イギリスの小さな町の劇場で芸術監督をやっていたピーター・チーズマンが完成させた手法です。インタビューを繰り返して、物語として、その人の言葉で語ってもらう、あるいはこれを専門家の俳優に語ってもらう、という。この方法は、一人ひとりが全員文化を持っていることをまず受け入れようというところから始まったようです。

## 文化の前ですべては個性に

多文化共生という話をすると、言葉の違いをまず思い浮かべる方がおられます。

でも言葉の違いなんか、はっきり言って、なんでもないんです、私に言わせれば。言葉



ドキュメンタリープレイはまずインタビューから始まる

の違いがあることにこだわること自体が、おかしい、間違っています。

文化の前では“違い”は豊かさです。障がいの有無、国籍の違い、男女の違い、あるいは大人と子どもの違いも、もっと言えばセクシャルマイノリティーの人も、すべて違いが豊かさなんです。

違わなければ文化は生まれません。特に演劇で考えれば、違ってないと演劇にならないんです。日常生活の中で何か新しい価値が生まれる、つまりドラマが生まれるのも、みんなが同じではなく違うから。なんにも言わなくてもわかるっていうのはおかしいでしょ。違いがあるから会話がなきゃいけない。その中で、新しい価値をつくる。

文化の前、あるいはアーティストの前では「すべてが個性になる」というのが僕の考え方です。そしてその個性とはその人の文化。だから、その文化をどれだけ混じり合わせるができるかがとても大事なことだと思っています。

## 劇場から届けるリアルのか

最初にアーラに感じた違和感——なぜ税金を納めているのにこの人たちはアーラから得るものがないのか、なぜ文化を担うアーラが彼らに目を向けてないのか。

この違和感が今、「多文化というのはみんな誰でも多文化なんだよ、ということを受け入れてから始めるもの」というドキュメンタリープレイにたどり着きました。まだ完成しているわけではなく、これからも新しい手法や技術の集積だけでなく、もう少し多角的に多文化ということを考えていきたいと考えています。

そうして私の考える多文化共生プロジェクトをなんとか実現したい。これがうまくできれば、「文化施設、劇場っていうのはこういうものだよ」というのを提示できると思うんです。

イギリスにあるウェストヨークシャー・プ

レイハウスで見た光景が私にとっての原点になっています。

この劇場はリーズというイングランド北部のまちにあるんですが、移民がたくさんいるんです。そんなまちで、英語を母国語としない親に育てられている移民の子どもたちが通う学校に、劇場が、さまざまな人を派遣する、SPARKというプログラム。SPARKとは、SPort+Art+Knowledgeです。つまり、アートとかスポーツとか——例えば演劇的な手法で英語や算数の学習を行う——を劇場が学校に届けるんです。これが原点。

アラでは、常時30～60人ほどの参加者が稽古を行っています。今は節電などもあり、スケジュール調整が苦しいんですが、それも受け入れる。それが多文化の交流プロジェクトかなと思っています。完全主義なアーティストにはできないプロジェクトです。参加者がいなかったり、「この人がいないとできない」ということもあったりします。それもショーの条件として受け入れることが、多文化の精神だろうと考えています。

これこそがまさにドキュメンタリープレイなんです。だから、外国人の方も見に来て、やっぱり共感をする。このドキュメンタリープレイの手法は今後も続けていきたいと思います。まだまだ研究の余地はありますが、「人間の持っているリアル」は何よりも強い、心に届くというのが私の考え方です。

## 体温を感じる劇場に

誰かのドキュメンタリープレイを聴いた観客の中で、また新しいドラマが生まれていく。これが演劇的手法のおもしろさです。さらに、ある意味で自己紹介にもなるドキュメンタリープレイには新たなコミュニティを生み出す芽があります。

アラを、極めて体温を感じる劇場にしたんです。特別に通訳がいなくても、一緒に演劇をつくる中で共通語が生まれる——これが体温を感じるということだと思います。



あらゆる「違い」を受け入れて創造される「多文化共生プロジェクト」公演



さらなる進化を目指すala

現在は、参加してくれている外国人の方を中心に、演劇的手法による「ワークショップ・ファシリテーターの育成」もスタートしています。まずは言葉の壁をどういうふうに乗越えて（あるいは受け入れて）、防災の知識や災害時の情報を伝達するかを学び合う、防犯ワークショップ“Michi”。こちらはまだ手探り状態で、どういう方向になるのかわかりませんが、進めていきたいですね。

### 略歴：

**衛 紀生**（えい・きせい）

早稲田大学中退後、虫プロダクション企画演出課に勤務。ほぼ同時に演劇批評家として雑誌『新劇』等に連載を始める。早稲田大学文学部講師。県立宮城大学事業構想学部・大学院事業構想学研究所客員教授を経て現職。現在、文化庁芸術拠点形成事業委員、芸術文化振興基金地域文化活動専門委員、長岡芸術文化振興財団アドバイザー、日本照明家協会賞舞台部門、ニッセイバックステージ賞等の審査委員なども務める。